



緩和ケア週間のイベントを開催しました

緩和ケア内科部長 山田 陽介

毎年10月の第2土曜日は、「世界ホスピス緩和ケアデー」として、ホスピス緩和ケアの普及を目的とした様々なイベントが世界中で開催されています。日本では、厚生労働省が緩和ケアの正しい知識を普及・啓発するために毎年10月初旬の一週間を「ホスピス緩和ケア週間」と定めています。

当院では10月4日～15日の間に1階エスカレーター付近～エレベーターホール付近と2階の外来フロアを中心に院内各部門（院内緩和ケアチーム・緩和ケア病棟・薬剤科・栄養科・総合患者支援センター）のスタッフによるポスター掲示イベントを開催いたしました。

がんや心不全と診断された時から、痛みやそれ以外のつらい症状、つらい気持ちを緩和するケアが必要であるとされています。特に昨今の研究結果から、がんや心不全と診断された早期から緩和ケアを受けながら、治療・療養・仕事・趣味などのバランスをうまく保つことが、病状の経過に大きく影響するとわかっています。

このように、近年では「緩和ケアは最期の時にだけお世話になるもの」という昔の誤った認識から大きく変わってきています。今後もひとりでも多くの方々に緩和ケアを知って頂けるよう、活動を続けてまいりたいと思います。



豊島病院 予約センター 03-5375-5489 (紹介予約制)

予約受付時間 平日9時00分～19時00分 土曜日9時00分～12時00分

インスリン発見から100年

内分泌代謝内科 山口 悠

11月14日はWHO（世界保健機構）の定めた「世界糖尿病デー」です。特に2021年は「インスリン発見100周年」の節目の年であり、今回はインスリン治療の歴史を振り返ります。

★世界糖尿病デーとは

11月14日は、インスリンを発見したカナダのバンティング博士の誕生日です。糖尿病治療に画期的な発見に敬意を表し、この日を世界糖尿病デーとしています。

世界糖尿病デーのキャンペーンには、国連やどこまでも続く空を表す「ブルー」と、糖尿病との闘いのための団結を表す「輪」がデザインされています。



★インスリンの歴史

インスリンの発見 1889年、膵臓を全摘出した犬が重症の糖尿病になることが発見され、膵臓から分泌されるホルモンが糖尿病の原因になると予想されました。1921年、カナダの外科医のバンティングは膵臓抽出物を糖尿病の犬に投与する実験を行いました。すると、血糖値が低下し膵臓の抽出物には血糖値を下げる物質があることがわかりました。これが「トロントの奇跡」と呼ばれるインスリンの発見です。



動物由来のインスリンの時代 当時は、山のようなブタの膵臓から、たったボトル1本分のインスリンしか抽出できませんでした。1923年には製剤化に成功しましたが、副作用も多かったです。様々な工夫がされましたが、動物由来であるため、需要に生産が追いつかないだけでなく、アレルギー反応を起こすことなどもありました。

ヒト由来のインスリンの登場 1960年代にはインスリンの構造が解明されました。しかし、当時の作成方法では高額で、実用化には至りませんでした。1982年には、ブタインスリンを改造してできた世界初の半合成ヒトインスリン製剤が発売されましたが、この方法でもひとりの糖尿病患者さんが1年間に使用するインスリンを賄うには約70頭のブタが必要でした。ちょうどこの頃、遺伝子工学や遺伝子組換え技術の進歩により、遺伝子組換えヒトインスリンが登場しました。



様々なインスリン製剤の開発 遺伝子組換え技術の登場により、ほとんどのインスリン製剤がヒトインスリン製剤に変わりました。1990年代以降、様々な作用時間の異なる製剤が開発され、食後血糖の制御が以前よりも可能になりました。また、週1回の注射で済むような安定して長い持続時間を持つインスリン製剤の開発などが続いています。

★当科について

内分泌代謝内科では10泊11日（火曜日～翌週金曜日）のスケジュールで糖尿病教育入院を行っています。初めて糖尿病と診断された方、糖尿病の治療が上手くいかず食事療法・運動療法を学びたい方は是非ご相談下さい。

